

ご紹介頂いた田口孝雄でございます。年の瀬の一日、神主もノーネクタイ、……皆さんどうか肩肘はらず、やわらかくお付き合いください。お手もとの刷り物に沿って進めて参ります。

1. 鈴木重成公、三河に生まれ上総に育つ

これからお話しする鈴木重成公は天領天草の初代代官で、「近世熊本の群像」のお一人とはいえ、お生まれは三河でございます。現在の愛知県、その東半分が三河、西半分が尾張ですが、かつては三河、尾張、また隣の美濃と、あの地域からは天下を争うような人物が輩出していますね。今日名古屋圏と言われるエリアです。

その三河地域のずっと奥まった所に足助町（あすけちょう）があります。溪流と紅葉が美しく、豊田市の奥座敷と言ってもいい人口一万の町。その一角、かつて東加茂郡足助庄則定村（ひがしかもぐん・あすけのしょう・のりさだむら）と呼ばれた山間の村が重成公の生誕地です。父は土地の豪族・鈴木忠兵衛重次。質実剛健で鳴る三河武士です。

レジュメをご覧ください。家系図を掲げております。重次の子たちの一番右、すなわち長子が重三（しげみつ）、次に重猛（しげたけ）、次はお姉さんですが当時の慣例として名前は記されていません、次が三男できょうの主人公の重成公、そして弟の重之、信正、一番下に妹さん。鈴木重次は徳川家康に仕えましたから、家康の関東移封に伴い、一家は三河を出て上総の塩子村へ移住することになります。重成公3歳の時です。

長兄の重三公は後に旗本の地位を捨てて出家し、鈴木正三（しょうさん）と名乗った、とてつもない仏教者（作家・思想家）でした。

また、次兄・重猛の子の重時が細川越中守光尚に仕え、熊本の地に定住して今に至る「肥後鈴木」の祖となりました。自分たちの祖先に鈴木重成という立派な方があって、という風に誇らしく感じていらっしゃる現在の肥後鈴木の方々にとって、重成公は「遠い昔の叔父様」と言えるような存在です。

2. 戦場を駆ける若武者から有能な幕臣へ

天下分け目の関が原の戦いは、西暦で1600年ちょうどですよね。それから後の大坂冬の陣、夏の陣には重成公も父や兄たちとともに戦場を駆けています。1603年には徳川家康によって幕府が開かれます。戦国の争乱に決着をつけ、新たな秩序、平和な時代の幕が開くという時にきょうの主人公は満年齢できっかり15歳でした。もの思う最も多感な年齢、独り立ちへの地歩を固めんとする年頃に、自分たちの主家である徳川家康が時代を開くわけですから、そこには格別な高揚があったに違いありません。

信州材木目付ののち、30代で御納戸頭（おなんどがしら）になられます。將軍お手もとの金銀を管理し、その衣服調度の出納、大名旗本からの献上品、將軍からの下賜品を扱うのが仕事で、若年寄の支配下で納戸役を統括しました。蒙った信用のほどが分かります。40の声を聞かれるころ將軍は秀忠のあと三代・家光となり、寛永5年、重成公は抜擢されて上

方代官に就任されます。まあ大坂の代官と考えてくださって構わないのですが、知行地は摂津、河内、それに播磨の一部に及び、また摂津・河内の堤奉行も兼ねたとはいえ、どうやら常には江戸に住まい、江戸城での勤めと兼務だったようです。兼務がどれほどの期間続いたかは定かではありませんが、それゆえの無理も多々あったと思われます。

3. 天草・島原の乱が起こり出陣、原城包囲網の中へ

寛永 14 年 10 月、天草と島原で激しい一揆が起こります。双方の一揆勢は合流して有名な「天草・島原の乱」へと膨らみます。当時の普通の呼び方では、だいたい「有馬の陣」ですね。

一揆はどのようにして起こったのか、なぜ起こったのか、といったことは巷間さまざまに取沙汰されていますし、皆さんも重々お勉強のことと思いますが、やはり基本的には苛政に対する反抗だったということ。凶作続きの中、過酷な年貢の取立てに堪えきれなくなってという、主として経済的事情ですね。次にそれがさまざまな要因を絡めながら、直線ではなく渦を巻くようにして膨らんでゆき、その過程でだんだん宗教色を帯びキリシタン一揆の様相を呈していったというのが実情のようです。益田四郎時貞を盟主に、いわゆる殉教戦的な意識を高めていったわけですね。そして原城に籠ること 3 ヶ月。

ここでちょっと差し挟んでおきたい事柄が二つあります。

一つは天草一揆、島原一揆の相手のことです。世の中には、天草も島原もいきなり江戸の幕府を向こうに回して殉教戦を戦ったかのようなイメージを持つ人がいるからです。そんなことはないのです。少なくとも当初は、島原は藩主・松倉、天草は飛び地領天草の領主であった唐津の大名・寺沢（実際には番代・三宅藤兵衛のいる富岡城）を攻撃したのです。

もう一つは、カッコ付き「殉教」戦のことです。一揆に及んだ天草・島原の百姓は、当時は邪宗門だキリシタンだと恐れられ、排除されましたが、後世、特に戦後は一転して美化する傾向があらわです。“弾圧に堪えて信仰を守り、人間平等を叫んだ殉教者たち”というように……。ですが、ヴァチカン（ローマ法王庁）は今なお天草・島原の乱の戦死者を殉教者と認定していません。あれは殉教ではありません、と。

さて、一揆勢は島原と天草が呼び合い、集結して原城で戦います。それが非常に頑強であったため、幕府と九州諸藩は、これは天下の一大事！ と連合軍を組んで攻撃をかけます。ところがこれがなかなかかはばかしくない。幕府連合軍（追討使・板倉重昌）は、いわば“多国籍軍”でチームワークがよろしくなく、もともと戦う集団ではない百姓漁師を前にひどく手こずるわけです。幕府がここでこれはまずいと思うのは無理からぬことですが、奇妙なことに板倉を免ずることなく、重ねての追討使として松平伊豆守信綱が派遣されます。“知恵伊豆”の異名を持つ、幕府きっての切れ者です。それを知った板倉は焦り、サムライの名誉もここが先途とばかり、寛永 15 年正月ついたち、元日というその日に総攻撃を掛け、みずから先陣を切って華々しく討ち死にしたのです。直後に松平信綱が到着。信綱は持久戦に持ち込み、敵を兵糧攻めにした挙句、2 月 27、28 と二日がかりの総攻撃で原城

を陥落させ、3万7千とも言われた一揆軍を壊滅させます。

この有馬の陣に加わっていた意外な人物として、よく宮本武蔵の名が挙がったりしますが、実は上方代官・鈴木重成公も鉄砲奉行として参戦されたのでした。

幕府記録（寛政譜）には、「(重成)落城のとき先登して軍功あり」とありますが、ここで鉄砲賄方の「先登」は疑問ですね。ここは先陣をもって武士の勇猛果敢を表す故例にならったもの、その常套句と見ておきたいと思います。小説の作者たち——『雲さわぐ』の藤井素介、『切腹』の黒瀬昇次郎、『アニメの鳥』の石牟礼道子といった皆さんが誰一人重成公に「先登」させていないのもっともだと思うのです。

戦場で重成公は何を見られたか。そこで目の当たりにされたのは、武闘集団ではない、人を殺したことなんかないただの百姓漁師たちが莚旗立てて侍集団に対峙し、必死に抵抗している姿でした。そういう民百姓の姿でした。逆に言えば、4万足らずの戦争素人を12万余の戦争玄人が攻め殺すという修羅でした。もちろん攻撃側の一人としてそれを肌身に感じられたに違いありません。そんな鈴木重成公が、今度は天草の民を治める代官として島へ入る、——天草初代代官における「原城体験」は決定的な意味を持つことになります。

4. 天草は天領となる

天草の地は、中世には天草五人衆と呼ばれた土豪たちが勢力を張っていました。やがてキリシタン大名・小西行長の治めるところとなり（キリスト教が急速に広まったのもこの時期）、関が原の後は論功で唐津藩主・寺沢志摩守広高の飛び地領となります。

もっとも、家康をはじめ加藤清正に与えようとしたのですが、清正の目に天草は、地味がやせていて豊かでないし、住民は一揆を起こすような不逞の輩に満ちている、と映ったようでして、真っ平御免！ と断り、豊後を望んだのでした。

それでも唐津の殿様は転がり込んだ天草を4万余石と過大評価（天正の検地では2万余石）し、これをもとものの領地の8万石に上乗せして12万石大名にのしあがります。これで、江戸城での大名の序列はもうぐっと上がる。この島の悲惨は実にここに始まるというべきでしょう。

皆さんよくご存じの司馬遼太郎などは、島原と天草の領主には「いいかっこうをしたさのあまり」の「凶暴としか言いようのない愚かさ」が共通していた、と言っているんですね（『街道をゆく』17）。

寺沢の業績にはもっと検討し、正當に評価すべきところもあるのだと思いますが、まあそういったことで天草では大変に評判が悪い。自分のエエカッコシイのために民百姓がどれだけ苦しむか、それが分からないのだから暗愚としか言いようがない、と。これが司馬さんの言い分ですね。そして天草・島原の乱の引き金は確かにそこにありました。

幕府は寺沢（この時は子の兵庫頭堅高）を謹慎処分とした上で、天草の地を没収し、直々に治めることにします。天領とも公領ともいわれる、幕府直轄領にしたわけです。

九州の天領のうち、例えば長崎は国際的な観点からの要所ですね。日田は杉の美林が欲

しかったのでしょうか。が、天草に何があるか。何もない。あるのは危険要因ばかりです。島は疲弊しきっています。今後苛政によって、あるいは凶作、天変地異などによって立ち行かなくなる惧れは十分にあり、またただでさえキリシタンが多く、その頑強な抵抗に手を焼いたばかり。放っておくと何をしでかすか分からない。キリシタンを一掃して暮らしの立ち行く平穏な島にもってゆく、…これが天草を天領化した基本的理由と言っていると思います。もちろん天領は細川藩とか鍋島藩とかどんな藩にも属することなく、幕臣たる代官がこれを治めます。

ところで今日、「水戸黄門」というTVドラマが長く続けば続くほど、代官＝悪代官といった固定観念が広がっていないでしょうか。「越前屋、お前もやるのう」「ふふ、お代官ほどでは…」といったような…。しかし天領とか代官とかの研究をひたすらやってらっしゃる方があり、全国の、実は悪代官ではない、本当に優れた民政官であった代官さんがこんなにいましたよと、そんな本を書かれました（村上直『代官―幕府を支えた人々』）。それはもう随分昔、私がまだ大学生のころで、ある日渋谷の大きな本屋で題名に惹かれて手に取ってみると帯にそう書いてあった。躍る気持ちで開いてみると、しかし十数人の名代官の中に鈴木のスの字も出てこない。早速下宿に帰り、著者に手紙を書きました。ここ一番の心持ちで、道具は毛筆、文字は旧仮名。今思えば随分礼を失したのではないかと汗の出る思いですが、数年後に著者は調査の上改訂版を出し、鈴木重成公をその名代官列伝の中に書き入れてくださいました。ことほどさように、そのころはまだ学界、専門研究者の間でも鈴木代官の知名度は低かったと言わざるを得ません。

5. 天領天草の初代代官となり、戦後復興計画を進める

さて重成公は幕府記録（『寛政重修諸家譜』）に、乱終結後「なほかの地にとどまり…16年10月肥後国天草荒廢の地開発のことをうけたまはり…」とあるように、天草の戦後復興計画を練りあげ、幕閣に献策します。寛永18年冬、天領天草の初代代官として着任した重成公は矢継ぎ早にこれを実行に移してゆきます。

では、レジュメの白抜きで番号をつけた項目を、ざっと見てゆくことにしましょう。マスコミは近年、これらを戦後復興のための「マスタープラン」だとか「構造改革」だとか評しています。

①移民を誘致する——乱により働き手がいなくなった天草と島原に、戦後復興の担い手を呼び込もうという作戦。鈴木代官の献策によったと思われる、幕府の政策です。九州諸藩からは1万石につき1戸の割合で、例えば50万石の肥後細川藩からは50家族、天草へ行くように奨励しなさいと。それで目立つのは熊本と隣の鹿児島なのですが、遠くは瀬戸内の島々からもぼつぼつと移住者が、天草へ、島原へと入っています。牛馬も連れて行きます。移住者には住まいを提供し、農具は貸与、種苗も無償で与え、3年間は年貢も免除するなど優遇策をとるのです。先住者は、よそから来た人があれだけ働くのだからと刺激を受けたのではないでしょうかね。

②一揆犠牲者を供養する——例えば一揆犠牲者の亡骸をうずめた富岡の首塚に供養碑（いま国指定重文）を建立し、慰霊の法要を営んでいます。大坂から是が非でもと招いた名僧・中華珪法の撰文は今なお鮮やかです。

しかし皆さん、これらは当たり前のように、全然当たり前なんかじゃないんですね。すでにお気付きでしょうか、一揆犠牲者って、大部分はキリシタンなわけですよ。江戸城での感覚で言えば、彼らはご法度の信仰を捨てず、御公儀に逆らって戦いを挑んだ不屈き千万な百姓です。ですから幕府側の責任者が、幕府に反抗して死んだ百姓の弔いをするというのは、これは随分危ない仕事ではないでしょうか。実は上方代官としては大坂の臨南寺で法要を営み、大坂冬の陣・夏の陣の豊臣方戦死者を慰霊しています。天草へ渡ってからは富岡で天草の一揆犠牲者を、南有馬では島原の一揆犠牲者を弔っていらっしやいます。敵のために祈る、とはキリスト教的な言い回しですが、これはさしずめ、慈悲心ゆえの、どう言ったらいいでしょう、「ほっとかれへんやないか！」とでもいうような、切羽詰った思いの発露だったでしょう。

③町村を再編する——城下の富岡に町制を敷き、120余の村々を86ヵ村に統合し、その村々を10の組にたばねる。組には大庄屋、村に庄屋・年寄り・百姓代の村方三役を置いて行政の仕組みを整備し、村の自治的能力を高めるとともに、触れの徹底（上→下）と民情の把握（上←下）とに努めました。

近頃日本の近海にすこぶる物騒な動きが頻発していますけれども、鈴木代官の時代には天草の西海岸、見晴らしのきく要所3箇所（富岡・大江・魚貫）に設置された遠見番所に、遠見番と呼ばれる地役人8人が常駐して、不審船の接近など海浜有事に備えました。有事の際は、狼煙をあげて知らせました。また福連木の御林には山方役人が配置されました。

ちなみに、天領となった天草では、富岡以外、まずお侍の姿を見ることなどほとんどありませんでした。富岡城には城詰めの細川藩士が若干いましたが、その他には代官所の役人に現地採用の地役人を加えても20人足らず。従って天草の百姓の暮らしは、お武家様の御威光を恐れながら暮らす、というようなものとは縁遠いものでした。

④医療と衛生の普及を図る——今のイラクでもそうですが、戦争の後というのは病気、ことに伝染病が大変なわけですね。そういう時に無医村状態ではどうにもならない。そこで代官は島内3箇所（上・崎津・佐伊津）に医師を配置します。薬草に関する書物（『本草綱目』など）をお寺に納めて島民の指導に当たらせ、衛生の普及を図ります。医師の養成にも気を配りました。重成公はどうやら医業の現場に通じていらしたらしいというエピソードがあります。寛永8年9月、疝痛に苦しむ二代将軍・秀忠に家伝の薬を献上し本復せしめたことが幕府資料（『徳川実紀』）に記録されています。

⑤定浦制を定め、漁民の地位保全を図る——七つの漁港を公認（七浦という。富岡、牛深、崎津、二江、御領、佐伊津、湯舟原）し、各浦には弁指を一人ずつおいて管理させ、地場漁民を近隣他国漁民の横暴から守ります。製塩を行い、浦方運上も決めました。後世「海は七浦、ハイヤの唄よ」と音頭に歌われるのがこれです。

⑥神社を復旧し、あまたの寺院を建てる——天草にも以前からたくさんのお宮があり、お寺がありました。それが一揆で打ち壊し・焼き討ちに遭い、仏像がすっからかんになるなど実に哀れな状態になっていました。代官は島民が神仏をたつとぶ古来の信仰に立ち返ることを願い、民心安定の方向をそこに見定めました。そして尊敬する兄・正三（しょうさん）を政策顧問に招き、寺社の復興創建に意欲を注ぎました。

さきほど赴任前に戦後復興プランが練られたことを申しましたが、その献策の折に、移民のこと、寺社復興のこと、年貢減免のことなどについては内々に承諾を取り付けていらしたに違いないと今日では考えられています。貧苦に喘いで一揆を起こした人たちに、今さらお寺を建てる力なんか、いかなる意味でも残っているわけがないのですから、幕府の力を頼み、幕府から特別に資金を投入してもらったと考えられます。それほど当時創建された天草の寺々は、天草の経済力からしてどこも驚くほど立派なのです。殊に曹洞宗の東向寺と国照寺、浄土宗の崇円寺と円性寺のいわゆる「天草四ヵ本寺」は独礼寺で、広壮な堂宇と寺領を誇りました。また、交渉を重ねて「寺社領」300石も認めてもらいました。これは年貢約1万5000石のうちの300石を寺社に寄進してその維持・運営費に当てようというものです。これで食うや食わずの島民にのちのちの負担をかけなくて済みます。逆に建設工事が各地で相次いだため、人々は仕事に出て収入が得られるようになったわけで、これは「公共投資による地域浮揚」とも見られます。本来寺社の復興は心の面の事業ですが、このように甚だ経済的リアリティを伴っている点は、正三公・重成公おふたりによる戦後復興策の特異な一面と言えるのかも知れません。

⑦キリシタン対策——天草地方のキリシタンを一掃することは、おそらく幕府が代官に与えた最大の任務だったでしょう。互いの命は、他の何ものにもまさって尊重されなければならない……ゴッドとイエスを信じ、ハライソを求めて3万7千人が死んだ有馬の陣を繰り返させてはならない……領民を死なせてはならない。こうして粘り強い説得と同時に絵踏みも行われました。しかし人間の内面を力づくでどうこうすることはできませんから、これは本当に気の重いことで、目こぼしの例が多く伝えられているのもむべなるかな、という気がします。

一方兄の鈴木正三公は『破切支丹』を書いて、西欧一神教の持つ唯我独尊性、排他性を厳しく論難し、日本の精神風土とは相容れないことを力説しました。数ある排耶書（キリスト教批判の書物をこう呼びます）の白眉とされ、いま岩波の思想大系にも収められています。



以上7項目を急ぎ足で追ってきましたが、ここで大阪在住の歴史家・寺沢光世さんが書かれた一節を読み上げて、ここまでのまとめにしたいと思います。

「重成公は寺沢時代の先例を尊重しつつ、寺沢時代には十分でなかった医療・経済・思想の三分野で優れた政策を実施し、民衆の救済に大きな実績を残した。…重成公が取り組んだものは、病の克服、貧困の克服、心の迷いの克服であり、これらのことは宗教の枠組みを超えた全人類的課題である」（鈴木神社社報「鈴木さま」8号）

6. 悲願、「石高半減」

天領天草の石高は、寺沢時代からの4万余石を踏襲していました。その石高にそもそもの問題があったことは先程申しました。

天草再建を目指す鈴木代官は、ここでまず大幅な年貢減免の挙に出ます。史料集でそのころの村の年貢割りなど見ていますと、しばしば「帳面荒れ」を表す言葉に出合います(例、寛永19年赤崎村)。その結果、「4公6民」の時代だというのに、天草では、実際のところわずか20%前後の年貢しか徴収されていない、という驚くべき実態がそこに浮かび上がってくるのです。この、帳面荒れによる非課税というのは無論、代官の裁量です。

しかし、きっちり年貢を徴収するのが役目の代官所が、そういつまでも帳面荒れといった理由で税の減免を続けることは不可能でしょう。それに、この地の問題を真に解決するためには、やはり石高そのものの是正に向かうほか無いわけです。

レジュメに○の付いている4行ほどは、今日まで一般にこのように理解されてきた、ということをもとめた部分です。読んでみましょう。

「承応(じょうおう)2年10月15日、重成公は天草の石高半減を訴えて自刃。幕府これを哀れみ、病気の体にとりなし、二代目代官重辰公もよく先代の遺志実現に挺身したため、万治2年6月、幕府は父子二代にわたる代官の熱誠を汲んで天草の石高を2万1000石と改め、告知した」

7. 自刃否定説について

そこで、その重成公の自刃(切腹)というのは根拠の無いことだと、そうおっしゃる御仁(学者さん)がいらっしゃる。3人ほどいらっしゃったが、お一人は先年亡くなった。しかしまあ、はっきり否定というのではなくても、何か話が出来すぎてる感じだなあとか、切腹した証拠って確か無いんですよ、といった気持ちの方はこの会場にもいらっしゃるでしょうね。

これらは大変微妙な問題なわけですけど、ううん、ちょっとここで話題を転じて一息いれましょうか。そろそろ皆さんもお疲れでしょう。

○

昔々の中国の書物『韓非子』にこんな話が記されています。ある人物が夜、隣国の王に手紙を書きました。近臣に「燭を挙げよ」(＝暗いから燈火をもっと高く持ち上げてくれ)と言ったのはいいとして、うっかり手紙文中に「燭を挙げよ」と書き込んでしまいます。受け取った隣国では大臣が「燭を挙げよとは明を尚べ、明を尚べとは賢者を登用せよということに違いありません」などと賢しらを言います。王はその意見を採用し、在野の賢者を積極的に挙げ用いた結果国はよく治まったというのです。これに関し、この書物の編者は「国は確かによく治まったが、しかし手紙を書いた人はそんなつもりではなかった。近頃の学者にはこの手の牽強附会が多い」と手短かにコメントを付け、すぐ次の話題に移ります。ある男が街に出かけ、靴を買おうとして「あ、いけない。家に足の寸法書きを忘れてきた」。

そう言って舞い戻り、急ぎ引き返したが店は閉まっていた、というのです。おかしい話です。自分の足で履いてみるのがいちばんなのに、我々人間はとにかく文字に弱い。書かれた文字に縛られ、書いてなければ証拠が無い、信憑性が無いと、すぐこうなる。そういう人間の、ある意味での愚かさですね、そんな愚かさを直視し超えようとして『韓非子』の編者はこの寓話を書き入れました。

学校を続けられなくなって退学する場合、そこにはいろんな事情がありますが、いかなる事情にせよ、学校の帳簿には概ね「進路変更」だと記録されます。委細を問わない点ではサラリーマンの「一身上の都合」も同断。いわゆる後世の史家で、これらの「記録」を見て、何カアルナ、と睨まないような御仁など底が知れています。

戦場で死ぬことが武士の本懐とされ、サムライの暁の上の死など自慢にならない時代がありました。それは「死ス」一語で足りたのであって、それをことさらに「病死」と書き留めた文書や碑文を、われわれは鵜呑みにすることができない。むしろ“武士の「病死」は病死に非ず”が常識だった時代のことを忘れてはいけませんね。

○

承応2年10月15日 上方代官兼天草代官・鈴木三郎九郎重成公（66歳）、死去。

12月22日 重成公の実子・重祐公（13歳）が三郎九郎家を継承（大和代官のち佐渡奉行）。

承応3年 正月 天草富岡に鈴木重成公の供養碑が建つ。

3月9日 重成公の養子・重辰公（45歳）が天草代官職を継承（のち京都代官）。

こういう一連の動きの中で富岡の重成公供養碑はどんな表情を見せるか。そんなことを少しばかり検討してみたいと思います。

①死の3ヵ月後に建った鈴木重成公供養碑

碑には漢文でこんな風に書かれています。

——天草は「兇徒一揆」の後、村落は荒廃し、島民の多くが死んだ。天草の「郡職」となった「鈴木重成公」は「仁有り義有り」、「儒門の君子」「武門の良匠」と称すべき方であった。在職十余年の間に「社寺を再興」し、「村民を撫育」し、「仁政甚だ大」であった。着任一年足らずで島は往古に勝る豊饒を取り戻すに至った。しかるに参勤のため江戸に向かうや「私宅に至り不意に病床に就」いた。医師は「手を拱き術を失ふ」。天命はいかんともしがたく、そのまま亡くなってしまった。直ちに信義に厚い代官所の重臣たちがこの地に石塔一基を建立し、供養のため法要を営んだ。

いかがでしょうか。これがその死から3ヵ月（江戸から訃報が届くのは約一月後。したがって実質一月半）、承応3年正月までに急ぎ建てられた碑文の前半、ほとんど唯一病死説を裏付けるという文言です。

鈴木一族は、実は二度、家断絶の危機にさらされています。

一度目は正三出家の折でした。

小さいときから人間の生き死について根源的に思惟する人であり、哲学的だった正三

は、大坂での戦場体験を通していっそうその傾向を強め、42歳で出家を願い出ます。封建社会の、それは許さるべくもないご法度ですね。お咎めを受ければ切腹も覚悟していたと後年正三自身が語っています。しかし将軍秀忠は鷹揚に「ん、鈴木のは出家ではあるまい。隠居であろう」、そう言って丸く収めてくれたのです。感激した正三は仏道修行、説法三昧の日々を送り、ある意味では完全な自由人の境涯を獲得します(父重次の跡目は重成が相続)。そして半分お坊さん、半分俗人(半僧半俗)の生涯を通すことになります。しかし、将軍が言った隠居とは、自分が身を引いて誰かが家を継承するということですね。ところが長男重辰(13歳)は自分の出家後すぐに弟の重成が引き取って養子にしている。そこで家光の小姓を勤めた三宅重長を見込んで養子に迎え、のちには重成の娘をその妻にして、鈴木九大夫家の断絶、また血筋の断絶をともに回避することができたのでした。

二度目が重成公自刃の時です。

事は将軍に対する、また天下の御政道に対する身を捨てての異議申し立てです。家断絶の命が下ることは紛れもないですね。

かつて「義といふは、ぐっと死ぬことなり」と言った正三公も、弟の代官が救世済民のためにぐっと死ぬ道を選んだとき、愁嘆の余り「三郎九郎相果て我等老(としよ)り残り候て一入(ひとしほ)迷惑申し候」と書き、困惑を隠しませんでした(弟子・不三への手紙)。「迷惑」とは途方に暮れるという意味です。鈴木家側でもいろいろ画策はあったようですが、お上の側でもその自死は一方では十分同情に値することであり、もう一方では如何にも外聞を憚ることです。将軍・家光の死、慶安の変の記憶も新しい折から、世情不安も懸念されていました。このような場合、当時よく用いられた処置法は、病死にする、ということでした。実はさっきお話した正三公出家の経緯も、幕府の公式資料(寛政譜・徳川実紀)には「病にかかりて仕へを辞し」などと記されているのです。正三公の出家も病気、重成公の切腹も病気。こうして富岡では急遽供養碑を建て、そこに「不意に病床に就いた」だとか「天命はいかんともしがたい」だとか、果ては「医師も手をこまねき、サジを投げた」などの文言を敢て刻み込んだと考えるのが妥当ではないでしょうか。

かくて、家督相続も、代官職の継承も、ともに何事もなかったかのように収まる場所に収まって行った。しかも重成公七回忌の年に、悲願の石高大幅削減が実現します。

言ってること、強引ですか？ しかし歴代の郷土史家たちが「幕府はこれを病気の体にとりなし」というように記述してきたのは、歴史に対するそういう読みがあつてのことと考えられますし、そして何より、代官自死が古く天領時代から草の根にささやかれてきた事実こそ重い。堺屋太一の指摘も重要です。別の件に関してではありますが、

「この当時(注、重成公の死から約50年、赤穂事件のころ)の習慣として、二度までの嘆願は礼になかったものだが、三度繰り返すのは非礼な非常手段と見なされ、時にはそれだけの理由で切腹を命じられることさえあつた」(『峠の群像』下巻・第三部)。

②一町田八幡宮の石灯籠

この石灯籠は重成公の死を約2ヵ月後に控えた「八月吉日」の建立であることに因み、

研究者の間では近年、江戸に在る重成公の病氣平癒を祈願して奉納したものと性格づけられています。果たしてそうか。大いに検討の余地があると、私は思います。

風化してたいそう読みづらくなっているのですが、そこには「八幡宮……祈願者 當奉職」、次の行に行って「鈴木重成公病即消滅福寿増長武運長久子孫繁昌祈所」と、こう刻んである。それをある方が、重成公の病氣が早く良くなりますようにと村民が祈ったものだ、と読んだわけです。この文脈でそりゃあ無いでしょう、と言いたい。実際はそうではなくて、「当八幡宮に郡職たる鈴木重成公が参拝され、郡民の病即消滅・福寿増長・武運長久・子孫繁昌を祈られた」ということでしょう。祈りの内容はいずれも四字熟語で表された当時の普通の言葉であり、特殊でもなければ特異でもない4項目であって、一町田八幡宮では永年「五穀豊穰・家内安全」と記憶されてきたほどです。代官が土地の守護神に詣で、領民の安寧と繁栄とを祈られたのです。そして昔の碑文では人物に敬意を表して改行し、その人物名を行頭に持ってゆく例が非常に多いことに注意すべきです。そうすれば「鈴木重成公の病」のような誤読は避けられ、すんなりと「祈願者 當奉職 鈴木重成公」と把握されます。以上のことから、この石灯籠の碑銘をもって承応2年秋に重成公は重病に陥っていたとする主張は成立しないことになります。

③塚本政直の書き入れ

島原藩士・塚本政直が文化年間に天草に渡り、島内を巡検して文政年間に完成させた全島絵図には、余白部分に天草の歴史事項がびっしり書き込まれています。その中に石高半減に関して「蓋達其議以身命…」の文言が見られます。「蓋し其の議を達するに身命を以てし…」。

「蓋し」は「思うに～」などと訳されることの多い語なので、この引用部分も筆者塚本の推量に過ぎないかのように思われがちです。しかしこの語の用法はそれに留まるものではありません。また「身命を以て」というのも、熱心に、くらいのことを誇張しただけで、つまりは比喩の域を出ないと断言する向きもあります。しかしそれは、「命がけ」を軽く使ってしまう現代の感覚からの、上滑りの解釈ではないでしょうか。

「蓋し」には、真相を明かしたり踏み込んで説明したりする用法、すなわち「実は～なのだ」と訳すべきケースが多々あることに注意を払うべきです。『史記』などにもしばしば見られますが、日本漢文にもたくさん出てくる用法です。そうしてみるとこの部分は、「実は鈴木代官が石高半減の目的達成のために身命を賭けた結果である」という風に読まれます。重成公の最期からすでに170年。同時代の証言というのではなく、むしろ170年の時を経た文化文政のころ、そのようにしっかり受け止められ伝承されていた、ということの重要性に注目しておきたいと思います。さて最後の小テーマ、

④古来、神になった人とは

人は死後、誰でも神様になるわけではありませんね。皆さんどうでしょう、神社の祭神になった歴史上の人物として、どういう方が思い浮かびますか。

(……会場から声……)

やあ、どうも。いろいろですよ。で、いま声の上がった東照宮（徳川家康）とか加藤神社（加藤清正）などは、実は日本の神社の古来の在り方からはちょっと遠いのです。人を祭る神社で、日本人の死生観に根ざす古来の在り方の典型は、天満宮（菅原道真）であると私は考えています。悲運に斃れた方、非業の死を遂げた方、社会公共のために尽くし犠牲になった方。これらは特に手厚く慰霊し、鎮魂につとめなければならないという感覚です。そこにおのずから働く、放っておけないという感覚、何と崇高なと思う感覚。人が死後神に祭られるというのは、概ねそのような民衆の感覚、古来の死生観に基いています。ですから、そうでない権力者・勝利者が祭られる例は昔々はありませんでした。

変わり目は豊臣秀吉です。死後、遺命によって創建された豊国神社（京都）は彼自身を祭る神社です。だったら東照宮（日光）は出来て当然、そしてわが藩には藩主を祭る神社をというなりゆきです。明治になってからは歴史の転換点に立たれた天皇、そしてあまたの忠臣たちが各地で祭神になっています。いろんな点で古来の在り方とはだいぶ違うことがお分かりいただけたと思います。

そのようなことを考えますと、どんなに立派だったからといって、またどんなに自分たちのために尽くしてくれたからといって、天草の民衆も一代官さんをそう簡単に神様にしたとは考えられないわけです。

歴史読み物作家の童門冬二さんは近年あちこちで鈴木重成公を取り上げ、タイトルにも「天草で神になった男」などという言い方をしていますが、確かに天草では島内 33 カ所で重成公を神に祭っているのです。ええ、鈴木神社の他に、…大部分は小さな石の祠ですが、鎮守の森の境内とか村落を見はるかす山の上とか。

石牟礼道子さんは先年、そんな木立の中の「墓石とも地藏さまともつかぬ苔むした石」の「鈴木さま」を訪れて随分胸を打たれたようでした。そうして書かれた文章の一節、

「天草の人たちは、この島のために割腹して果てた代官のことを子々孫々にまで語り伝え、自分たちの視界の届く足がかりのよい所を選んで手造りに近い石碑をたて、まわりの草を払い、花や供物を手向け続けたのである」（『煤の中のマリア』）。

私のところでは、重成公一柱を祀っていた石祠を天明 8 年（1788）に木造社殿に改め、正三公・重辰公を合祀しました。各村々でもこれに倣いました。重成公の偉大な治績の陰に正三公の思想と献策があり、その仁政も重辰公に引き継がれて成就したことに思いを深くしてのことです。合祀祭は相撲の興行など殷賑を極めました。しかし先程申し述べたとおり、はじめに重成公が祭神になっていなければ「鈴木三神」の成立はあり得ませんでした。それにしても、かつて僧侶であった正三公を祭神の一柱とするあたり、天草民衆の心根の寛闊さには舌を巻く思いがします。

終わりに

このように天草では、初代代官・鈴木重成公に正三公・重辰公を合わせた三者を「鈴木さま」と呼んで敬愛の念、思慕の情を寄せてきました。昨今研究者の間で言われる「三者

の一体的評価の必要性」は、天草ではもう 200 年以前の島民の自然な感情として存在した、という風に言うこともできるでしょう。目下「鈴木三公像」建立計画が、これは神社のこととしてではなく、市民のこととして進行中です。

「鈴木精神」ということが言われます。今日ではその稀有にして崇高な武士道精神は「義をつらぬき、全力を尽くして世のため人のために奉仕する愛の心」というように定義され、神社の膝元の小・中学校では玄関や廊下、体育館などに額入りで大きく掲揚されていたりもする（はじめにそう言った者としては少し気恥ずかしい）のですが、私は人それぞれの鈴木精神があっていいと思っています。

この後、愛知県へ出向きます。足助で行われる正三・重成二公像の序幕式出席のためです。像には「きずな」という題が付けられているそうですが、近年愛知と熊本の絆は深まるばかりです。マスコミはこれを「鈴木三公が取り持つ縁」と言っています。



さてもさても、私たちは日頃あわただしい時間を生きて、地に足が着いているのかどうか。折々に 300 年前、400 年前のことを「つい昨日のこと」として、その頃の人々の暮らしや心をたずねる旅に出る。そうして足元を確かめる。この講座はそういう講座だと思います。で、きょうは、志高くして多くの人々のために困難に立ち向かったおサムライの生涯をしのんでみました。お誘いを受け、喜んで出て参りましたけれども、つたない話で皆さんを疲れさせただけかもしれません。お許してください。